

モンゴルゲルの構造と食事空間

—青海省海西州のモンゴル牧畜民を中心に—

阿 盈 娜

A Yingna

非文字資料研究センター 2018年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】ゲルとは、モンゴル民族の遊牧生活様式に適應するように組み建てや解体が比較的容易な伝統的移動式住居である。先行研究を見ると、モンゴル国や内モンゴルに関する研究が多いが、本研究の調査地である青海省海西州モンゴル人のゲルについての論文が少ない。本研究は青海省海西州モンゴル人のゲルを構成する重要な木製の部分の名称、形や機能について詳しく紹介する。そして、ゲルが持っている幾何学的な形の特徴、つまり円形がゲルの内部の空間の利用にどのように有益であるかという分析に基づいて、調査地モンゴルのゲル内の空間を四つに分けて、それぞれの空間の利用について詳しく紹介する。それによると、モンゴル人は自然環境と牧畜生業の影響で、科学的にみても円形の有益性を最大に利用していることが分かる。特に、食事をするときのゲル内の空間では男女や世代などの順番を重視することから、モンゴル人の固有信仰と価値観を示す。

The Structure and Eating Space of a Mongolian Ger

— A Study of Mongolian Livestock Farmers in Haixi Prefecture, Qinghai Province —

Abstract: The ger, also known as yurt, is Mongol's traditional movable house that can be assembled or dismantled easily to suit the Mongolian people's nomadic lifestyle. While there are a number of studies on Mongolia or China's Inner Mongolia Autonomous Region, few have shed light on the Mongolian ger in Haixi Prefecture in Qinghai Province, where this survey was conducted. This paper focuses on the ger in Haixi Prefecture and examines the structure's integral wooden parts, including their names, shapes and functions. It also analyzes the merits of the round-shaped dwelling's geometrical features for the occupants using the internal space. Dividing the internal space of the region's ger into four areas, it considers how each area is used. This analysis shows how the Mongolian people's use of the round space maximizes its scientific benefits and how it is influenced by the natural environment and livestock farming in the region. The paper also offers an explanation about Mongolian indigenous beliefs or values reflected in the way they prioritize gender-based or generational order, and demonstrated prominently when they share meals in the ger.

はじめに

山口昌伴は食べる営みの場所を論じる際、空間を主体として取り上げ、人間、時間を環境と考えた(山口昌伴 1999:47)。モンゴル人にとって、食べる営みの場所は、ゲルである。ゲルは家畜を伴って季節ごとに移動する遊牧生活に最も適した形に発達したものである。今までのモンゴルゲルに関する研究は、建築学や居住環境の視点からなされたものが多い。管見の限り、ゲルの中の食事空間を主体として論じている論文は少ない。

筆者はモンゴル人の飲食文化について注目してきた。石毛直道や山口昌伴などの研究から、モンゴル人の飲食文化を研究する際には、食事空間についての研究が重要であると認識している。

本論文では、青海省海西州に暮らすモンゴル牧畜民の伝統的な住宅であるゲルの構造とその効能を述べる。そして、ゲルが持っている幾何学的な形の特徴、つまり円形がゲルの内部の空間の利用にどのように有益であるかを分析する。また、青海省海西州モンゴル人のゲル内部の空間の利用について詳しく述べる。さらに、モンゴル民族の生産や生活の基礎、日常生活の全てがゲルの中に凝縮されていることを明らかにする。

I 先行研究

モンゴルにおけるゲル研究については、建築学、文化人類学、生態学などの分野で多数の研究が見られる。「ゲル」を中心に研究されたモンゴル語と中国語の著作は7冊見受けられる。

テ・メータル、レ・タリンソロンの『ゲル』(テ・メータル 1987)は、文化人類学分野からゲルの形成、変容、発展の原因を探求することを目的としたものである。ゲルの構造、部品、様式、形の変容を各歴史的段階で分けて、詳細に述べられている。

巴・布和朝魯は著作『蒙古包の文化』(巴・布和朝魯 2014)の中で、民間伝承文学、習慣、生活様式など多角的な視点からゲルの起源と発展を検討した。

郭雨橋は『细说蒙古包』(郭 2010)という著作でモンゴルゲルの特徴、科学的原理、ゲル形成前の建築、構造などモンゴルゲルの全体像を示した。この本の第6章「モンゴルゲル内外の配置と展示」の中では、ゲルの中の様子が紹介されている。しかし、食事空間という視点からは論じられていない。郭はこの本をモンゴル語と中国語の2カ国語で出版している。この中国語版は唯一、漢字でゲルを全体的に論じた著作である。

以上のゲルに関する研究は、食事空間やその空間中の男女の行動など視点からの検討が十分ではないと思われる。

1944年5月、梅棹忠夫は初めてモンゴルを訪れた。当時の張家口に居を構えて、3度にわたって奥地の草原に赴き、モンゴル人の牧畜生活についての調査研究を行った。その研究結果が『梅棹忠夫著作集』(梅棹 1990)や小長谷有紀が整理した『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』(小長谷 2013)である。この二つの資料は昔のモンゴル人の生活様式を表している。ゲルの構造や道具についての図や資料は本研究にとって非常に重要な資料である。その他、ゲルに関する研究論文には、モンゴル国ウランバートル市のゲル地区における定住ゲルやゲルキャンプなどモンゴル人の居住に関する

研究がある。また、内モンゴル社会は、社会主義化以降、中国の政治、政策によって大きな変化を遂げている。住居についても、移動式住居「ゲル」から固定家屋へと変化した。こうした変化に関する研究も多い。INAX ギャラリー企画委員会の『遊牧民の建築術：ゲルのコスモロジー』（INAX ギャラリー企画委員会 1993）の中の小長谷有紀の「儀式のなかのゲル — あるいはゲルのなかの女性」、蓮見治雄の「ゲルのコスモロジー」や内澤旬子の「ゲルからゲルへ — 羊と草原の国をのぞく」など、写真や絵を利用して、ゲルとゲルに関する文化を取り上げた研究がある。

こうした研究は、本研究の調査対象である青海省とモンゴル国のモンゴルゲルとゲルに関する文化を比較する際に、不可欠な資料である。

那木拉は「ゲルの変遷と空間変化 — ゲルから固定家屋へ移住を考察して —」（那 2012）の中でゲルと固定部屋の構造、組み立て方、利用の空間構造などを紹介している。環境への配慮の面から分析しながら、文化の変容について検討を行っている。この論文ではゲルと固定部屋の空間構造が「かまどの場」、「かまどの小型化」や「キッチンの内面化」など食事空間として検討されている。この論文は筆者が調査対象とする地域のゲルや固定部屋の空間利用、道具などと調査内容が異なっており、後に詳しく論じる。

モンゴル人のゲルや固定部屋内の生活空間の秩序については、もう一つの論文がある。それは吉日本図の博士論文『内モンゴル・チャハル地域における伝統的遊牧生活にみられる文化としての時間：遊牧生活における培われた自然との共生の知恵に基づく「もうひとつの発展」』（吉日本図 2018）である。彼はゲルに関する方角の観念や、ゲルの中の生活空間を詳しく分析した。

以上で紹介したゲルに関する内容は全てモンゴル国や内モンゴルのゲルを対象にした研究である。また、世界各地に居住しているモンゴル人のゲルの細かいところを分析すると異なる点が見つかる。以下は青海省に居住するモンゴル人のゲルに関する研究である。

贾晞儒は、青海省モンゴル族のゲルについて、『‘デード’（青海）モンゴル族文化の簡論』（贾 2014）中の第6章「特色があるデードモンゴル族の居住文化」で言語学的な視点からゲルの構造および文化意義を論述している。

跃进は『青海省海西州モンゴル族の風俗文化』（跃 2009）の第2章第1節「居住」の中でゲルの構造、飾り、書類や新しいゲルに関する風俗を紹介した。この二つの論文は本研究にとって重要な参考資料である。

アバルス・ジャ・シレブの『タイジナイル部落のモンゴルゲル』（アバルス 2018）は青海省海西州モンゴル人の部落の一つであるタイジナイル部落のモンゴルゲルを全体的に論じた。

本論文はこうした研究や、筆者の現地調査データに基づき、青海省モンゴル人のゲルの中の食事空間について述べていく。その上で、ゲルの中の食事空間の利用が、現代の住宅の中の生活空間に与える影響と効能を分析する。また、青海省海西州に暮らすモンゴル牧畜民の食事空間の位置づけと道具などの面からの分析を行う。

II 調査地の概要

中国青海省は中国北西部、チベット高原北東部にあり、地形は北西の標高が高く、南東が低い。平均海拔は2600～3200 mである。気候の特徴としては日照時間が長いものの、標高が高いため寒く乾燥している。また紫外線が強く、年間平均気温は $-5.9 \sim -5.1^{\circ}\text{C}$ 、年間平均降水量は100～300 mmである。

モンゴル帝国期、モンゴル人は初めてチベット高原に進出した。西暦1227年、チンギス・ハーンは臨洮、河州と西寧などの地域に進軍する。17世紀、西モンゴル四オイラト族連合のホシュート部の首長はグーシ・ハーン（トゥルバイフ）であった。彼はオイラト族連合軍を統率し、現在の中国ウイグル地域から出発し、西海地域を占領してチベット高原を統一した。清朝の雍正元（1723）年、ホシュート部のロブサンダンジンが清朝を攻撃したが、敗走を余儀なくされた。その後、清朝は西海ホシュート部モンゴルを四部に改編し29の「旗」を設置した後、土司は40に増えた。さらに西寧弁事大臣職を設置して現地ホシュート部モンゴル人を統轄したのである。そのうち、八つのモンゴル旗が現在、青海省海西モンゴル族チベット族自治州に含まれる。デレケ地域は青海モンゴル左翼ホシュート部北左旗に属していた。その旗は‘ケエルケベス’（Keerukebesu）と呼ばれ、封じられた人はグーシ・ハーンの第8子サンゲルザの息子ソナムダシである。都蘭県ゾンジャ地域は青海モンゴル左翼ホシュート部西北翼後旗に属していた。その旗は‘ゾンジャザサグ’（Zonjasasugu）と呼ばれ、封じられた人はグーシ・ハーンの弟セリンハタン・バテール（Serinhatan・bateeru）である。‘ケエルケベス’と‘ゾンジャザサグ’の牧地は現在の青海省海西州モンゴル族チベット族自治州に属している。1950年代以前、現地のモンゴル人は伝統的な遊牧を行い、春・夏・秋・冬という四季と草場の状態によって宿営地を移動する文化を伝承していた。ヤギ、ヤク、綿羊、馬とラクダなどを育て、牧畜業を続けている。1980年代になると、人民公社が解体された。それに伴い、家畜が個人に分配されるようになった。長距離移動および頻繁な移動は減少し、固定家屋であるバイシンも少しずつ建築され始めた。



図1 青海省海西州モンゴル族チベット族自治州の地図

III 青海省モンゴル人のゲル

ゲルは、モンゴル族と北方遊牧民族の代表的な住居であり、遊牧民が長い時期に牧草地と家畜相互作用と生態平衡の中で見つけた、一番適応する住居である（郭 2010）。「ゲル」はモンゴル語で「家」という意味がある。現代のモンゴル人にとって、ゲルは簡単な住居だけではなく、モンゴル人の伝統的な遊牧文化を象徴する不可欠なものである。ゲルの由来について、青海省のモンゴル人の間では次のような伝説が広がっている。

「昔むかし、天宮の中で‘チョリゴ・シャトデ’⁽¹⁾という物を作った、テンゲリがこれをモンゴル人の生活している草原の中央に運んだ。そして、天の意志に従い、‘チョリゴ・シャトデ’の形をまねて、現在のモンゴルゲルを作った。それから、モンゴル人は安寧で幸せな生活を送り、代々、住んできた⁽²⁾」。

この伝説ではゲルの由来を説明できないが、現地のモンゴル人がゲルに対して持っている親愛と尊敬の感情を表している。そして、モンゴル人の固有信仰と価値観も表している。

前述したように、1950年代以前、現地のモンゴル人は伝統的な遊牧を行い、春・夏・秋・冬という四季と草の状態によって宿営地を移動する文化を伝承してきた。ヤギ、ヤク、綿羊、馬とラクダなどを育てる牧畜業を続けている。1980年代になると、人民公社が解体した。それに伴い、個人と世帯ごとに牧地と家畜を再分配する「請負制」が始まった。多くの牧草地はフェンスで囲いこまれ、世帯ごとの管理となった。長距離の移動および頻繁な移動は減少した。今、現地のモンゴル人は毎年7～8月（草の状態と家畜の状態によって、営地に行く移動時間を調整する）の間に最も距離の長い移動を行っている。現地のモンゴル人は牧畜の休む場所（ヒツジ囲いなど）やゲルを組み建てる場所を「ブール」と呼ぶ。「ブール」の選択は季節によって異なる。夏と秋は山の頂上の陰になる部分で、風が吹いている涼しい場所に家畜を泊めるように営地を選択する。冬と春には山の谷間や日当たりがいい場所、山がない地域には周りに高い植物があり、寒い風や雪の災害を受けないような場所を選ぶ。そして、「ブール」を選択した後は、ほとんど移動しない。ゲルを建築した位置も変わらない。

筆者は、以前から青海省海西州モンゴル族に注目してきた。そして、2017年3～4月と2018年8～9月に青海省海西州都蘭県ゾンジャ鎮とデレケ市柯魯柯鎮で聞き取り調査を行った。本論文では青海省海西州都蘭県ゾンジャ鎮テンゲーレゲ村を調査対象地とした。この村では1984年人民公社の機能停止に伴い、14世帯ごとに放牧地が割り振られた。2018年の調査によると、この村の20世帯121人のうち、最初の14戸の世帯主と伝承者は昔のゲルを保存している。そして、村には1984年から1990年代初めまで、新婚夫婦のための新しいゲルを造る風習が残っていた。本論文では、まずテンゲーレゲ村の中の2軒のゲルの構造を紹介する。次にゲルの中の独特の空間に置かれている日常生活道具に注目し、特に食事の空間を紹介する。

1 ゲルの構造

ゲルの複雑な構造については、力学や建築学など自然科学的視点からの論文が多くある。本論文では青海省海西州モンゴル人のゲルの中の食事空間を理解しやすくするため、現地のゲルを内部木材、フェルト、縄の三つに分けて紹介する。そして、ゲルを構成する重要な部分の名前や効能を紹介する。

1.1 ゲル内部木材

ゲル内部の構造は全て木材で作られている。以下、ゲルの天窗である「ハラッツ」と、屋根を構成する重要な部分である「オニ」、側壁の部分に当たる「テレム」とドアの部分である「ウーデ」、柱である「バッヘニ」という五つの部分を紹介する。

①「ハラッツ」(Haraatsu)

ゲルの頂上に開けられた円い天窗を「ハラッツ」と呼ぶ。天窗中の「井」字形の木枠の部分は「ツアナーホラ」と呼ばれる、内側のフレームである。現在、ゲルの中では鉄製のストーブを使うので、ツアナーホラで煙突を固定するために丸形のものを作る。煙突を固定するものが付いている側はゲルの出口の側で、ゲルの中のストーブの位置を決める。現在、新しいゲルを造るときは、ツアナーホラの部分を鉄製のもので作ることが多い。牛の皮で作った細い縄で固定され、多数の穴がある複雑な内部構造になっている。「ツアナーホラ」と「ハラッツ」はゲルの安定性と直接の関係があるため、現地や周辺地域では、ニレの木を使う。ニレの木は硬度が適度で、弾力性がよく、腐らず、変形しにくく、割れにくいという特徴がある。ハラッツ内の多数の穴は「ホログ」と呼ばれる。ゲルを組み立てるとき、ホログに「オニ」という刺し棒を刺して、ゲルの屋根を構成する。

ツアナーホラとハラッツの二つの部分が組み合わされる4ヵ所には、中央の二つの穴を利用して、「ドレボン・エレグレッゲ」と呼ばれるヒツジの毛で作った縄を用いる。ゲルを組み立てるとき、この四つの縄は、「ハラッツ」(天窗)の正しい位置を確認し、ハラッツとオニをテレムに固定する重要な役割を担う。その他に、ツアナーホラの中央からつながっている「チグーダ」と呼ばれる縄がある。それはヒツジの毛で作られている。チグーダは、風が強いとき「バッヘニ」に掛けて、ゲルが吹き飛ばされることを防ぐために使われる。バッヘニがない場合は石など重いものをチグーダに掛けることもある。

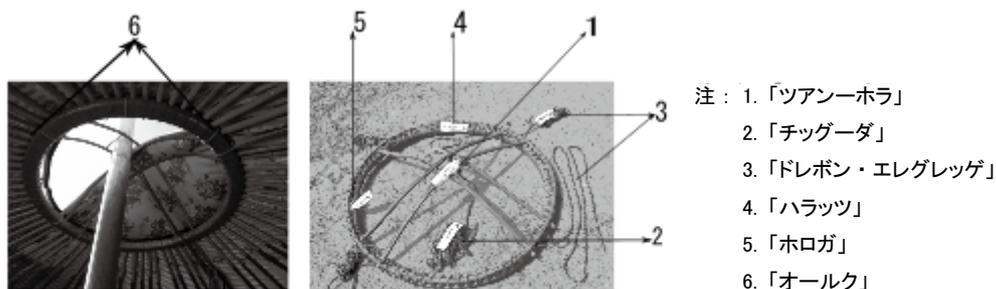


写真1 ハラッツ
(筆者撮影 2017年4月)

②「オニ」(Oni)

「オニ」というのは「ハラッツ」(天窗)とゲルの壁であるテレムに刺す刺し棒である。この刺し棒は二つの部分を結び、「ハラッツ」(天窗)とともにゲルの屋根を構成している。ハラッツ内のホログに刺すため、オニの先頭部は細くなっている。オニの後部には、テレムとつなぐためにリング状のヒツジや馬の毛で作った細い小さな縄が縛られている。ゲルを組み立てるとき、オニの後部をこの縄で「テレム」というゲルの壁の部分の先頭部とつなげてオニを固定する。そして、前に紹介したドレボン・

エレグレッグを利用してゲルの東、南、西、北の4方向を確認し、先に四つのオニを刺して「ハラツ」(天窗)を固定する。その後、余ったオニを刺す。オニの数はゲルの広さによって違う。オニやテレムは現地のアルカリ化した平原や砂丘に生える木材で作られる。その木材はモンゴル語で「スウーハ」、中国語で「紅柳木」と呼ばれる。この木材の硬度は高く、変形しにくく、割れにくいという特性がある。現地のモンゴル人はこの木材に魔除けの機能があると信じている。そのため、長い旅や狩猟活動を行うときには、木材を狼の牙のように仕立てたネックレスを身につける。



写真2 オニ
(筆者撮影 2017年4月)

③「テレム」(Teremu)

「テレム」というのはゲルの側壁の部分に当たる。調査地におけるテレムの骨格は24～44個の木の棒を斜めに固定し、菱形の格子状に形作られていた。テレムの広さは「トール」と呼ばれる。テレムの中の長い(長さが同じ)四辺形の木造の棒で決める。テレムを全体的に紹介しよう。一番上の部分はテレムの「トロゲ」と呼ばれる。両面の2個のトールの頭の部分が「ウデール」という木組みの軸で「V」形に構成する部分である、オニの後部を支えて固定する。「ウデール」はラクダの腱で作られており、木組みの軸に当たる部分である。テレムの菱形の格子に組んである接合部はピン構造になっているため、蛇腹式に折り畳むことができる。テレムの両側で最も短い木製の棒は6本あり、この6本の棒は「ドググリ」と呼ばれる。「ドググリ」は一つのテレムに24個付いている。テレムとテレムまたはテレムとドアを組み合わせるために作られる。このテレムとテレムを組み合わせる「V」形の部分を「ケイ・アム」と呼び、テレムとドアを組み合わせる「V」形の部分を「ウデール・アム」と呼ぶ。そして、テレムの一番下の地面に付いた「V」形の部分は「シエーリ」と呼ばれる。吉日本図が述べているように、ゲルを組み立てるとき、最初に折り畳んであったテレムを1枚ずつ広げ、それらをテレムとテレムのウデール・アムをヒツジの毛で作った紐でつなぎ合わせ、円を描くようにして壁を作る。⁽³⁾

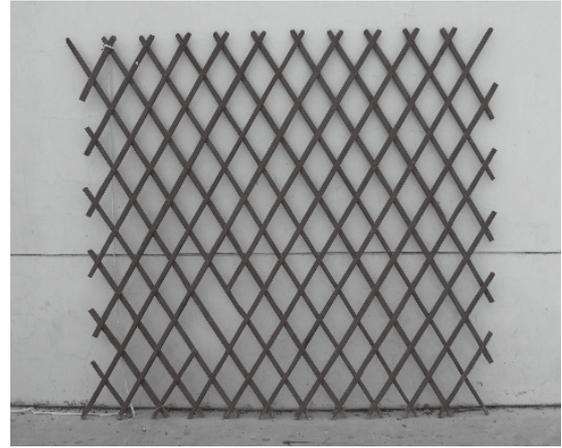
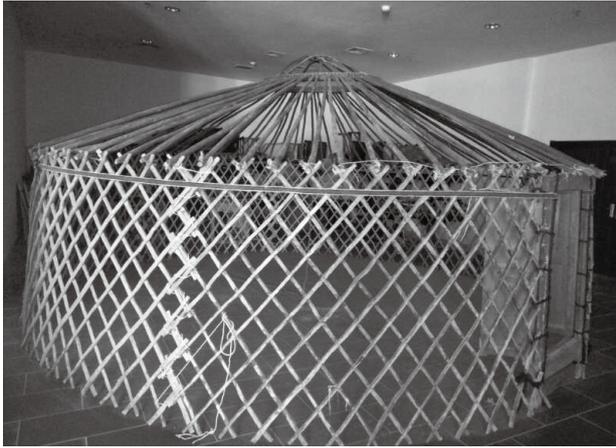


写真3 テレム
(筆者撮影 2017年4月)

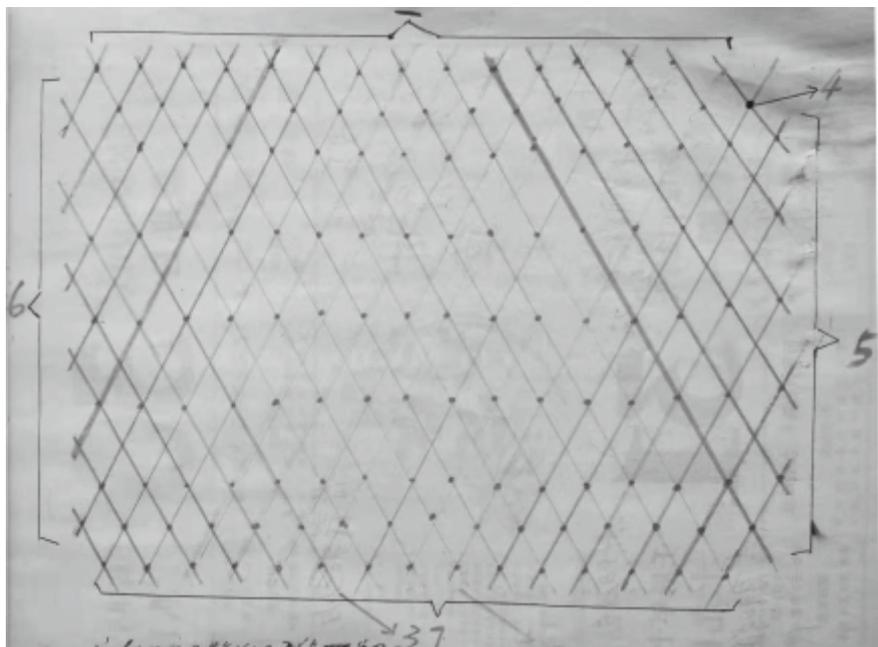


図2 テレム

(出典：調査地の牧畜民が書いた図である。注：1.「トロゲ」 2.「トール」 3.「ドッグリ」 4.「ウデール」 5.「ウデール・アム」 6.「ケイ・アム」 7.「シエーリ」)

④「ウーデ」(Ude)

「ウーデ」はゲルのドアの部分に当たる。「ハチャボチ」という戸の部分、「タドグ」というドアのかまち、そして「エレヒ」という敷居の三つの部分からなっている。冬の寒い時期は、ゲルの温度を保つため、ウーデの外に帆布とフェルトを合わせて作ったカーテンを掛ける。

海日汗は、ゲルのシステムを科学的に解析した⁽⁴⁾。古代からモンゴル人は太陽を崇拝していたため、ゲルの戸口方位は太陽の昇る方向に向けて建てていた。16世紀以後、ゲルは真南に建てるようになった。

モンゴル人の生活空間における方角観念に関する研究結果と筆者の調査によると、ゲルの正面、すなわち、入り口が向いている方角は常に南である。モンゴル人はゲルの方向に基づいた相対的な座標で方向を決めているのである。

モンゴル人はウーデを大切な部分であると認識している。敷居を踏むことやドアの上の部分に手を置くことなどはタブーである。筆者の調査で、年長の人たちが次のように語ってくれた。「大晦日の朝、ウーデの上にハダカ麦を卍繋ぎの形で置く。その後、エレヒをきれいに掃除して上にバターやコノテガシワ葉を飾る。「シュルームス」という妖怪などがゲルの中に入らないように、ある儀礼を必ず行う」と。

⑤「バガナ」(Bagana)

「バガナ」はゲルを組み立てるときに使う丸い棒である。オールクを持ち上げておくために使ったオニと同じように、頭の部分がV字形であるハラッツを支える柱のようなものである。ゲルを組み立てた後に、バガナを撤去するが、風が強いときだけ支える。しかし、6個以上のテレムから建てたゲルは普通の4～5のテレムで建てたゲルより安定性が悪い。そのため、ゲルの大きさにより1～3のバガナを使って、ゲルを支える。

筆者が内モンゴル自治区四子王旗で調査を行ったとき、小長谷有紀が論じた天窓トーノに直接、屋根棒オニを取り付けておき、傘のように広げられた形のゲルを見つけたことがある⁽⁵⁾。この形のゲルの中にも風が強い日以外、バガナは見られない。

⑥ゲル外の構造

前に紹介した五つの部分はゲルの中身の木製のフレーム体である。以下はゲルの外に覆うフェルト、帆布や縄の部分を紹介する。

A 「ウォルク」(Uoruku)

「ウォルク」というのは、「ハラッツ」を覆う部分のことである。二つの三角形のフェルト⁽⁶⁾を帆布で縫い包んで、三隅に三本のヤクや馬の毛で作った縄をつなげてある。現地のモンゴル人によると、天窓を組み合わせた「ハラッツ」と「ウォルク」を通して、火の神様やさまざまな神がゲルの中に入ってくると信じているため、「ハラッツ」と「ウォルク」を大事にしている。ゲルを建てるときは、「ウォルク」を人に踏まれないように、清潔な場所に置く習慣がある。そして、ゲルを建てるとき、最後に一つの「ウォルク」を「トガルグ」(ゲルの柱)を固定している長い縄に三隅の縄をつなげて固定する。もう一つの「ウォルク」は雪が降る日や巨大な風が吹く日、残り半分の「ハラッツ」を包む。その作業をするとき、必ずゲルの主人が参加しなければならない習慣がある。また、ゲルを分解するとき、最初にゲルの主人が「ウォルク」を取り清潔な場所に置いてから、他の作業を続けるルールがある。



写真4 ウォルク
(筆者撮影 2017年4月)

B 「デーブリ」 (Deburi)

「デーブリ」とはオニを覆うフェルトのことである。「エムナ・デーブリ (前のデーブリ)」と「ホイナ・デーブリ (後ろのデーブリ)」という二枚で、オニを全体的に覆うことができる (那木拉 2012: 69)。二枚のデーブリの「ハラツツ」とつながる上端は「ホーライ (のど)」と呼ばれる。写真5の「ホーライ (のど)」の半径は43 cmであり、デーブリの半径は180 cmである。そして、写真5の右端の写真を詳しく見ると、デーブリの縁にヒツジの毛で作った細い縄を縫っていることが分かる。それを現地のモンゴル人に聞くと、デーブリのフェルトの形が雨などの影響で変わることがないよう、主婦が丁寧に縫っていると教えてくれた。

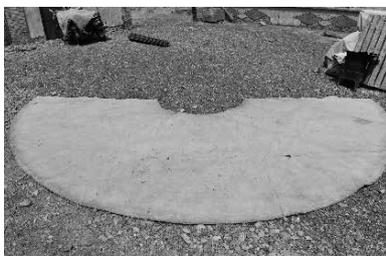


写真5 デーブリ
(筆者撮影 2017年4月)

2 ゲルの中の空間

住民の建物には強い幾何学的特徴がある。このような特徴は単純な幾何学的意味だけを具現化するものではない。それは社会から作られるイメージである。人々の生産活動を基礎とし、さらには象徴的な意味と文化的な意味を表している。ゲルはモンゴル民族の伝統的な建物の形式としての幾何学的な形の特徴、つまり円形とはモンゴル民族の生産、生活を基礎に、モンゴル民族の生活の全てを凝縮したものである。ゲルは上部の円錐体と下部の円柱体からなる丸い住居である。そして、モンゴル人のゲルは外からは小さく見えるが、中の居住空間は丸くて、非常に大きい。

次にゲルの形の優位な特徴について、先行研究と現地調査の資料に基づいて、分析する。

(1) 前に紹介した現地のモンゴル人のゲルに関する‘チョリゴ・シャトデ’の伝説をみると、ゲ

ルの形はモンゴル人の原始宗教であるシャーマニズムと関係があることが分かる。そして、モンゴル人はシャーマニズムの影響から、三角形や四角形の角や建物の隅のところに汚い、悪いものが隠れていると考えている。そのために、円形が一番いい形と考えているのである。

(2) モンゴル人はユーラシア大陸の内陸の高原(平均標高 1580m 以上)に住み、寒冷・乾燥で、風が強いという厳しい環境の下に暮らしている。そこでは、現在も牧畜が基幹産業として営まれている。ゲルの基本的な形は円形なので、風に吹かれる面は円弧形断面である。そのため正方形より風の抵抗は少なくなる。力学的な面からすると、曲面のストレス抵抗能力は平面より強い。このようにして、広々とした草原で、モンゴルの牧畜民たちは、突風と大雪に耐えることができるのである。

(3) 朝、太陽が昇るときから落ちるまで、1日中太陽の光がゲルの「ハラツ」からゲル内部に射し当たる。太陽の光は時計の針と同じく、ゲルの内部を毎日、順時計回りに一回りする。筆者が現地で調査を行った際、多くの年長者がゲルの中の光の位置で何時何十分まで正確な時間を教えてくれた。このように、現地のモンゴル人は昔からゲルの中に射し込んだ光の位置から時間を確認し、1日の牧畜生活を行っていたのである。この点も、丸い形をしているゲルの特徴によるものである。

(4) 数学では、「等周定理」という、表面積と体積に関する幾何学的不等式がある。平面内の滑らかな曲線で囲まれた領域 Ω を考える。 Ω の面積を $|\Omega|$ 、周の長さを L とすると、不等式 $4\pi|\Omega| \leq L^2$ が成り立つ。さらに、この不等式の等号が成り立つとき、 Ω は円盤に一致する。⁽⁸⁾ この定理によると、長さが一定の曲線で囲まれた図形のうち面積が最大となるようなものが存在する。それは円盤である。したがって、「等周定理」によれば、ゲルの円形はモンゴル人の居住空間を最大にしたといえる。また、モンゴル人はゲル内の円形の空間を二次元で割り当てて、ゲル内部の空間を十分に利用した。この点については次の部分で詳しく紹介する。

2.1 ゲルの中の居住空間

モンゴル人の方位システムでは日の出の方向を「前」といい、全ての方角を認知していた。モンゴル人はゲルを造るとき、季節に合わせた日の出の位置に戸口を組み立てる。ゲルはドアがある正面を南向きにして建てられる。そして、炉の位置を決めてから、炉を中心に住居内の生活財配置の場所と人々の活動空間を決める。筆者の調査地である青海省海西州モンゴル人のゲルについての調査では、ゲル内の空間の利用がほとんど同じであるので、以下は炉(火)を中心として、ゲルの中の丸い空間をかまどの空間、人々の活動空間と生活財配置空間の三つに分けて紹介する。

(1) 「ホイモリ」(Hoimori)

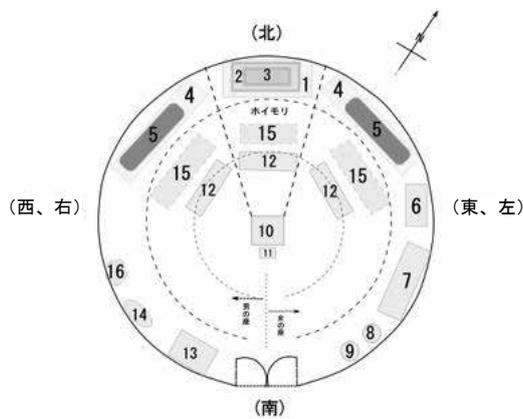
小長谷有紀は「戸口を入ると、中央にストーブがある。火の場所であり、かつては五徳が置かれていた。ここには、家系をまもる火の神が宿る。この神聖な中心点はゴロムトと呼ばれる。その奥はホイモリと呼ばれ、仏壇があり、家族の写真なども並べられる。いわば奥の座である。」⁽⁹⁾ と述べている。モンゴル人の方向認識では、「まえ」が「南」であり、「うしろ」が「北」である。モンゴル語の「ホイヌ」という言葉は、「うしろ」であると同時に「北」を意味する。そして、「ホイモリ」はモンゴルゲルの「うしろ」という意味がある。ゲルの真ん中のかまどを円心とし、ゲルの北側のテレムを円弧とした、扇形の空間を表す。

(2) 男性の空間

モンゴル人の方向認識では、ゲルの「右」が「西」であり、モンゴル語で「バローン・ビイ」と呼ばれる。男性の空間というのは、図4に示すように、かまどを中心にゲル内部の空間を右と左に分けた場合の、右の部分である。図4中の男性の空間に関する家財と空間の利用を見ると、4は前に紹介した1と同じ、地上とロッカーを隔離するための木製の棚であり、長さは1の棚より長く、とても細い。5は4の棚のような長さで、きちんとした衣類と布団と敷き布団を重ねたものであり、その上を綺麗な布で飾る。15はモンゴル族の伝統的な絨毯である。12はゲルの中で用いる低い食卓である。日常生活や年中行事で男の人は年齢や世代別に着席する。ホイモリに近い席は上位である。夜、食卓などを片付けて、男の人はこの側に寝る。14は馬のくらであり、その周りのテレムの上に馬に乗る道具や、昔狩猟活動に使った道具を飾る。13は、寒い冬の夜に牧畜民が体の弱い子ヒツジを過ごさせるために作った場である。



写真7 男性の空間



- 注：4、地上とロッカーを隔離するための木製の棚
 5、衣類と布団と敷き布団
 10、かまど
 12、食卓
 13、コヒツジの場
 14、馬のくら
 15、絨毯
 16、ソーム
 ()内は、ゲルの方位を表す

図4 ゲルの平面図2

16は「ソーム」と呼ばれ、乳を脱脂する時に必ず使う道具である。小長谷有紀はこの道具について、「乳製品加工の過程で排出されたシャル・オス（乳清）は、モドン・ガンにされる。それは、おおきな円錐形の木の桶である。」と紹介した。筆者は2017年青海省海西州のモンゴル牧畜民の乳製品作りについての調査で「モドン・ガン」に似た道具を発見した。写真8は筆者が2017年の調査時に撮影した道具である。これは現地で、乳加工体系中の脱脂に用いる道具である。この道具の持ち主は45歳の牧畜民で、彼の祖母は昔これを使って乳製品を作っていたという。彼の家では新しい同じ道具があるが、一方でこの道具の代わりに乳製品を脱脂する鉄製の機械も見つかった。



(10)
図5 乳加工用の桶



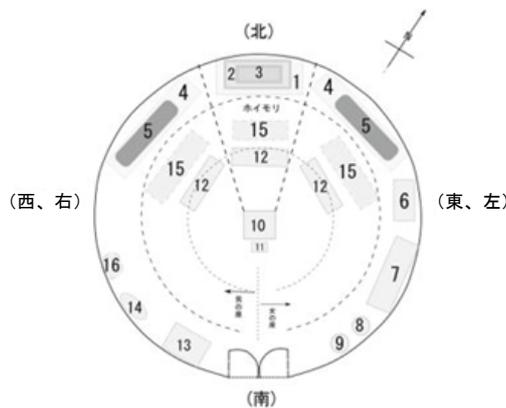
写真8 ソーム

(3) 女性の空間

ゲルの右側の男性の空間に対して、ゲルの左側は女性の空間である。モンゴル人の方向認識では、ゲルの「左」が「東」であり、モンゴル語で「ジューン・バイ」と呼ばれる。女性の空間というのは図3に表したように、かまどを中心にゲル内部の空間を右と左に分けた場合の、左の部分である。図6の女性の空間に関する家財と空間の利用を見ると、4、5、12、15は前に紹介したものと同じで、日常生活や年中行事の中で女の人はこの側に年齢や世代別に着席する。ホイモリに近い席は上位である。夜、食卓などを片付けて、女の人はこの側に寝る。6は食事を置く木製の食品戸棚である。現地のモンゴル人は肉と乳製品以外に小麦とハダカ麦などの穀物を食べる習慣があるので、普段はこの食品戸棚の中にハダカ麦の粉や小麦で作った餅などの食品を保存している。



写真9 女性の空間



- 注：4、地上とロッカーを隔離するための木製の棚
 5、衣類と布団と敷き布団
 6、食品戸棚
 7、台所用品を置く戸棚
 8、ソーロク
 9、ウースン・ドンブ
 12、食卓
 15、絨毯
 ()内は、ゲルの方位を表す

図6 ゲルの平面図3

7は碗、鍋など台所用品を置く戸棚である。モンゴル語で「デン」と呼ばれる。普段は三段に分けて台所用品を収納している。8は乳を搾るときに使う木製の桶であり、モンゴル語で「ソーロク」と呼ばれる。梅棹忠夫の『梅棹忠夫著作集』第2巻の「乳をめぐるモンゴルの生態I——乳のしぼりかた、およびそれと放牧との関係」第1節(3)「道具と姿勢」では、実例をあげてソーロクと呼ばれる木の桶と乳しぼり時の用途を論じている。筆者が調査をしたとき、図14の木製のソーロクを見つけたが、現地でヒツジの乳を搾るときにこのような桶を使う家は少なくなっている。多くの家では鉄製やプラスチック製の桶を使うことが多くなっている。9は水を保存するための桶であり、モンゴル語で「ウースン・ドンブ」と呼ばれる。今でもゲルの中でたいてい見つけることができたが、多くの家は昔の物を保存しているだけで、日常生活では使用していない。代わりに鉄製やプラスチック製の桶を使っている。



(11)
図7 ソーロク、乳しぼりの桶



写真10 ソーロク (筆者撮影 2017年4月)

(4) かまどの空間

ゲルの中央にはかまどが置いてある。モンゴル語ではこの空間を「ゴォル」と呼び、中央や中心という意味だけではなく、「最も大事なもの、大事なこと」という意味も含んで⁽¹²⁾いる。図6中のかまどの空間に関する家財と空間の利用を見ると、10はかまどである。昔モンゴル人は「トルガ」と呼ばれる五徳を使っていたが、今では火の神様を祭るときだけ使う。日常生活の中では鉄製のストーブを使っている。梅棹忠夫の『梅棹忠夫著作集 第2巻』第四部「モンゴル遊牧図譜」はモンゴル遊牧民の生活の「生活」、「食事」、「生業」について、特にゲルの構造とゲルの中の炉、囲炉裏について内容を紹介している。それを筆者の調査地のゲルと比べてみると、モンゴル人のゲル内の生活文化が伝承されていることが分かる。11は燃料であるヒツジや牛の乾燥した糞を貯蔵する箱である。木や他の燃料と比べるとヒツジや牛の乾燥した糞は火が穏やかで、乳をさらにおいしく煮ることができる。そして、この空間は食事を作る重要な空間であるし、年中行事や他の祭祀をゲルの内部で行うときにはその中心として利用する重要な空間である。特に、図6の真ん中の丸形は「ゴォル」であり、日常

の生活や年中行事中で女の主人がこの空間を利用して、家に来る客を招待する場合、儀礼用食事を年齢や世代別順に献ずることができるようになる。そして、客のお茶や食事が足りない場合は早速発見して、供することもできる。モンゴル人は客を招待することを大事にするので、客に食事が足りないことは禁忌になる。

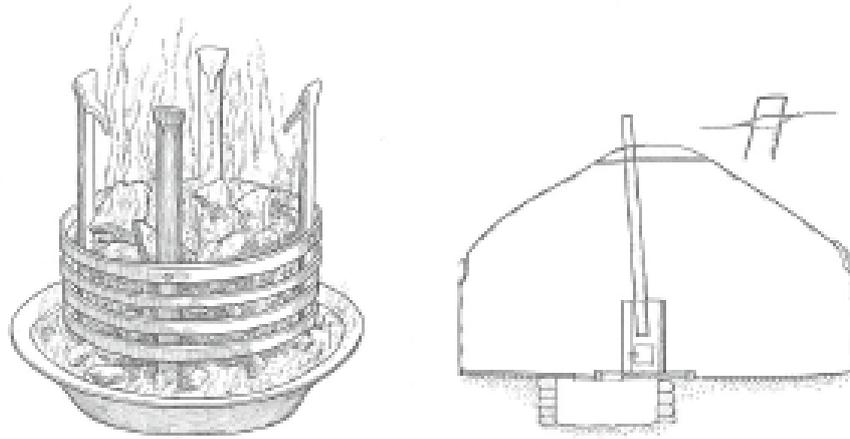


図8 トルガ (左) とゲル中のストーブ (右)



写真11 かまどの空間

まとめに

本研究では、青海省海西州に暮らすモンゴル牧畜民のゲルと食事空間について論述した。ゲルの内部構造と名前などを詳しく分析することで、モンゴル人が自然環境の影響で周辺を材料を上手に利用して、牧畜生活に一番適した住宅を造ったことが分かった。そして、ゲルの持つ幾何学的な形の特徴、つまり円形が、ゲルの内部の空間を最大にし、安定性や皆集まって過ごすようになるなどの利点を多くもたらしめていることが分かる。

また、本論文中でモンゴル人のゲル内部の空間に関する分類と利用について細かく見ると、「ホイモリ」という空間はモンゴル人の宗教信仰がチベット仏教であることや、この信仰が現地のモンゴル人に対して日常的に影響を及ぼしていることなども明らかにした。そして、男女の空間から見ると、昔の日常生活における男女の作業の分配状況や、年長者、家族や部族で役割を果たしている人に対する

る尊敬の念などを表していることが分かる。これらの空間の中で最も重要な空間である「かまどの空間」に関する記述から見ると、モンゴル人が火に関する信仰と伝統的な宗教である——シャーマニズムに関する習慣が今まで現地の人々の日常生活にも残っていることが分かった。そして、青海省海西州モンゴル人のゲル内部のホイモリ、男性の空間、女性の空間、かまどの空間を詳しく紹介して、モンゴル民族の生産や生活の基礎、日常生活の全て、ゲルの中に凝縮されていることを明らかにした。

註

- (1) モンゴル語で天および神を表す言葉である。テンゲリはモンゴルにおいて最高神として敬われた。
- (2) 賈晞儒 2014 『‘デード’(青海)モンゴル族文化の簡論』 p.103
- (3) 吉日本図 2018 『内モンゴル・チャハル地域における伝統的遊牧生活にみられる文化としての時間：遊牧生活における培われた自然との共生の知恵に基づく「もうひとつの発展」』 p.100
- (4) 海日汗 2004 『ゲルの方位についての研究—古代四ハナゲルにおける方位システムの解析—』 p.7
- (5) 小長谷有紀 1997 『アジア読本 モンゴル』 p.13
- (6) モンゴル語ではフェルトを「イッスゲ」と呼ぶ。
- (7) 刘迪南 2005 「モンゴルゲルの形状と象徴意味」『卫拉特研究』
- (8) Peter Frankl、前原潤 1997 「幾何学の散歩道：離散・組合せ幾何入門」
- (9) 小長谷有紀 1997 『アジア読本 モンゴル』 p.14
- (10) 小長谷有紀、堀田 あゆみ 2013 『梅棹忠夫のモンゴル調査 スケッチ原画集』 p.86
- (11) 梅棹忠夫 1990 『梅棹忠夫著作集 第2巻 モンゴル研究』 p.217
- (12) 那木拉 2012 「ゲルの変遷と空間変化—ゲルから固定家屋へ移住を考察して—」 p.73
- (13) 梅棹忠夫 1990 『梅棹忠夫著作集 第2巻 モンゴル研究』 p.566

参考文献

日本語

- 梅棹忠夫 1990 『梅棹忠夫著作集 第2巻 モンゴル研究』中央公論社
- 大林太良 1991 『北方の民族と文化』山川社
- 大林太良 1974 『日本古代文化の探究 火』社会思想社
- 面矢慎介 1997 「現代モンゴルの住生活と生活財：その考現学的調査」滋賀県立大学人間文化学部研究報告『人間文化』3
- 小長谷有紀・J. ルハグワデムチグ・Ma. ロッサビ・Mo. ロッサビ編 2013 「モンゴル国における20世紀」『国立民族学博物館調査報告』115
- 小長谷有紀、堀田 あゆみ 2013 『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』国立民族学博物館調査報告 111
- 小長谷有紀 2014 『梅棹忠夫のモンゴル調査：ローマ字カード集』国立民族学博物館調査報告 122
- 小長谷有紀 1997 『アジア読本 モンゴル』河出書房新社
- 那木拉 2012 「ゲルの変遷と空間変化—ゲルから固定家屋へ移住を考察して—」千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 241、pp.65-89
- 娜仁格日勒 2010 「現代モンゴル民俗における火の機能及び文化象徴—日本との共通性から—」『比較民俗研究』24、pp.229-237
- 海日汗 2004 『ゲルの方位についての研究—古代四ハナゲルにおける方位システムの解析—』早稲田大学大学院理工学研究科

- 別所 裕介 2014 「[生態移民になる] という選択：三江源生態移民における移住者の生計戦略とポスト定住化社会をめぐって」 アジア社会文化研究 15 pp.65-93
- 吉日本図 2018 『内モンゴル・チャハル地域における伝統的遊牧生活にみられる文化としての時間：遊牧生活における培われた自然との共生の知恵に基づく「もうひとつの発展」』 千葉大学大学院工学研究科
- 山口昌伴 1999 『食の文化・家庭の食事空間』 味の素食の文化センター
- D・TAYA 1995 「ジャングルにおける方位について」 日本モンゴル学会紀要 26
- 岩村忍 2007 『文明の十字路＝中央アジアの歴史』 講談社学術文庫
- INAX ギャラリー企画委員会 1993 『遊牧民の建築術：ゲルのコスモロジー』 INAX
- Peter Frankl、前原潤 1997 「幾何学の散歩道：離散・組合せ幾何入門」 共立出版

中国語

- 巴・布和朝魯 2014 『蒙古包文化』 内蒙古人民出版社
- 周立軍 2009 『中国民居建築集・東北民居』 中国建築工業出版社
- 郭雨橋 2010 『细说蒙古包』 东方出版社
- 刘迪南 2005 「モンゴルゲルの形状と象徴意味」 『卫拉特研究』
- 贾晞儒 2014 『‘デード’（青海）モンゴル族文化の簡論』 民族出版社
- 跃进 2009 『青海海西蒙古族民俗文化』 青海人民出版社

モンゴル語

- アバルス・ジャ・シレブ 2018 『タイジナイル部落のモンゴルゲル』 内モンゴル科学技術出版社
- テ・メータルレ・タリンソロン 1987 『ゲル』 内モンゴル文化出版社
- シラブドルジ 『モンゴルゲル』 ウランバートル出版社、不詳
- 中国人民政治協商會議東烏珠穆沁旗委員會編 1996 『モンゴルゲルの文化』 内モンゴル科学技術出版社
- 郭雨橋 2013 『细说蒙古包』 モンゴル古人民出版社